

映画を知りすぎていた男

アルフレッド・ヒッチコック



■『知りすぎていた男』や『サイコ』をはじめとする数々の名作を生み出した、英国出身の映画監督アルフレッド・ヒッチコック。生涯に制作した作品は53作にもものぼり、悪夢を紡ぎ出す手腕は現在も他の追従を許さない。今回は、観客を怖がらせることに心血を注いだ「サスペンスの巨匠」のサクセス・ストーリーをお届けする。

トラウマが生んだ映画の手法

産業革命による景気の拡大が既にピークを越え、英国経済は次第に陰りを見せ始めていたヴィクトリア朝の最末期。失業者が増加して社会主義も台頭し、労働者たちによるデモが絶えなかった1899年8月13日、ロンドンのイーストエンド、レイトンストーンの青果商の次男としてヒッチコックは産声を上げた。とはいえ、そんな状況下でも一家は裕福とまでは言えないまでも、比較的余裕のある暮らしを送っていた。

ヒッチコック家は敬虔なカトリック教徒であり、とくに父親は堅実かつ厳格な人物で、過度に道徳を重んじるヴィクトリア朝の時代にありがちな価値観の持ち主であった。

ヒッチコックが4、5歳の時のこと。父の言いつけで知り合いの警察署長に手紙を持って行くと、警察署長はその場で父親からの手紙を読むや否や、いきなりヒッチコックを留置所に閉じ込めてしまう。すぐに釈放されたものの、突然の恐怖におののく彼にはそれが数時間にも感じられたという。釈放された後、「悪い子にはこうするんだ」と署長に言われたが、悪いことをした覚えはない。それは父の「ちよつとしたしつけ」だったのである。

父の思惑は、予想以上の効果をもたらした。ヒッチコックは警官に恐怖を抱くようになり、「警察にお世話になるようなことは絶対避ける」と子ども心に誓ったという。彼は成人した後も、その時の暗くて長い留置所の廊下や、背後でカチリと閉まる重い鍵の音を幾度となく思い出し、やがてそれは権力への漠然とした恐怖や嫌悪へと転化していくのだが、このトラウマはありふれた日常に潜む怖さ、幸せと隣り合わせに存在する悪など、白日のもとに突然襲い来る恐怖を描き出す彼ならではの手法を生むことになる。また、『間違えられた男』や『北北西に進路を取れ』



ヒッチコックの生家跡は現在、ガソリンスタンドになっている(517 High Road, Leytonstone, London E11 3EE)。向かいの建物は、映画「鳥」をイメージした壁画で飾られている。

といった彼の作品に「身に覚えのない罪で追われる主人公」が繰り返し登場するのも、この幼少期の体験が一因となっている。

さらに、成長したヒッチコック少年が通ったイエズス会の寄宿学校は、体罰の厳しいことで知られた。教師たちはクジラの骨で出来たムチを持ち、言いつけを守らない生徒を罪の重さに応じて、規定の回数ビシビシ打つのが日常であった。彼は後年、「ムチで打たれる様な悪いことをしていないかという恐怖心が常にあり、いつもビクビクしていた」と当時を振り返り、「悪とは何か、善とは何かを考えるきっかけにもなった」と寄宿生活がいかに映画作りに役立っているかを皮肉まじりに語っている。そして体罰そのものよりも、「エンマ帳」に彼の名前がメモされ、放課後呼び出しを受けるまでの「猶予時間」こそが何より恐ろしかったと強調しており、観客をジワジワと怖がらせる手法を好んだことなどに、その影響を垣間見ることができる。

字幕デザインを持って突撃

「太って丸顔」の自身の体型にコンプレックスを持っていたヒッチコックは、幼い頃から人付き合いが悪く、一



「山鷲」の宣伝写真に映るヒッチコック（カメラの右手前で指を差す人物）。その後ろにいる女性は、のちに妻となるアルマ・レヴィル。



1926年、ケンジントンにあるローマ・カトリック教会「Brompton Oratory」で挙式した2人。

人で孤独に過ごす時間が多かった。エドガー・アラン・ポーやコナン・ドイルなどのミステリー小説を愛読、芝居好きだった両親の影響もあり、映画や演劇にも興味を持ち始める。好きな映画は、チャップリンやD・W・グリフィス作品。当時人気であったバスター・キートン、ダグラス・フェアバンクスの出演作も繰り返し鑑賞し、F・W・ムルナウやフリッツ・ラングといったドイツの巨匠監督が作りあげる奇妙な世界にも心惹かれた。映画雑誌も多く購読したが、それはよくあるファン雑誌ではなく、映画制作に関する技術雑誌や業界誌だったという。

物を知らないからできたことだ」と回想している。これがきっかけで、なんと同社の字幕制作班に採用。20歳の時のことである。そこで数多くの米国人脚本家たちと知り合い、シナリオの書き方を学んでいた。サイレント映画では、俳優は口を動かしているだけで、セリフはその後に字幕で出る。つまりテキスト次第で登場人物にどんなことも言わせることができるため、字幕上で脚本が書き直されることも度々あった。3年後、そのロンドン支社は業績不振により閉鎖されたものの、その間にヒッチコックは字幕制作はむろん、脚本や美術も手掛け、助監督的な仕事すらこなすようになっていた。

監督としての「こだわり」

米映画会社が撤退した後、英国の映画会社「ゲインズボロー・ピクチャーズ」が撮影所を買い取り、ヒッチコックを始めとする多くのスタッフが、そのまま残ることができた。彼は助監督として作品を撮るようになり、『女対女』（1922年）を制作するにあたって、明るく撮影現場の人気者だったスタッフのひとり、アルマ・レヴィルを

フィルム編集担当に抜擢。1899年8月14日生まれという、ヒッチコックから1日遅れで誕生日を迎えるアルマと彼はやがて交際を始め、4年後に結婚した。以降、アルマは57年にわたる常に夫を影で支えるかけがえのないパートナー、そして彼の作品のよき理解者となる。

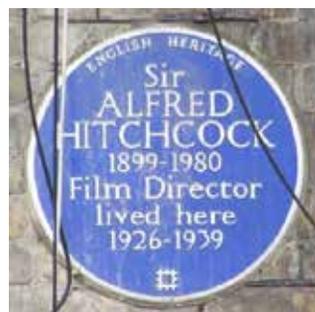
1925年、26歳のヒッチコックは初の監督作品『快楽の園』に着手。オリヴァー・サンデスの原作をもとにしたメロドラマ色の強いサスペンス物で、英独合作としてミュンヘンで撮影された。第一次世界大戦後の当時はヨーロッパ映画界の好況期にあたるが、なかでもドイツは『カリガリ博士』（1920年）、『吸血鬼ノスフェラトゥ』（1922年）、『メトロポリス』（1927年）といった数々の実験的で過激な名作を生み出し、ドイツ表現主義映画の隆盛期にあつた。ヒッチコックはそこで英国映画にない最先端の技術や、斬新なカメラワークを貪欲に吸収。なかでも『吸血鬼ノスフェラトゥ』や『最後の人』（1924年）などの斬新な演出で知られる、F・W・ムルナウ監督から「言葉に頼らず映像だけで映画を作ることを学んだ」。

頭の中で厳密にイメージした映像を再現することが、映画のリアリズムに達する方法だと考えていたヒッチコックは、全ての絵コンテを撮影開始までに完成させ、一度決まった構図は俳優の位置を含め1センチたりとも動かさなかった。絵コンテをカメラマンに渡し、現場では自身はカメラを一切覗かず、俳優の余計な動きや演技は煩わしいと切り捨てた。

監督3作目にあたる『下宿人』（1926年）のヒットで一躍有望な若手英国監督として認められた彼は、その後矢継ぎ早に作品を発表していった。

ハリウッドの英国人

ヒッチコックが家族と共にハリウッドへ移ったのは1939年。米国プロ



結婚後、ヒッチコックが妻や娘と暮らした家（写真中央／153 Cromwell Road, London SW5 0TQ）。1939年に一家でハリウッドへ移るまで13年間住んだ。



デューサーからの製作依頼がきっかけだった。この頃すでにヒッチコックは英国でもっとも才能ある監督のひとりになり、数えられており、俳優より小道具に気を配るといった評判や、「俳優は家畜だ」という毒舌でも知られ、ひねりのあるユーモアを持つ少々エキセントリックな人物という風評を得ていた。さらに、美食を好むことでも有名で、撮影合間の昼食はフルコース並み。お気に入りのメニューはステーキ、ポテト、サラダで、毎日好んで同じものを食べた（そこは英国人らしい）。昼食に招かれた俳優たちは、その量の多さに目を白黒させたという。

米国での第1作は、英国の女流作家ダフネ・デュ・モリアの小説を映画化した『レベッカ』（1940年）。ハリウッド進出当初、英国からみの作品ばかりをプロデューサーから依頼されるだけでなく、米国人の考える「英国」のイメージを忠実になぞらなければいけないこと、ロンドンの街中で男性がふつうに使う言い回しが、米国で

凝り性だった ヒッチコック

驚きの エピソード



下宿人 / The Lodger: A Story of the London Fog (1926年)

【あらすじ】2階に住む下宿人が殺人犯である可能性が濃厚になり、それに気づいた娘と恋人が小声で話し合っていると、頭上で下宿人が神経質に歩き回る足音が聞こえてきて…

この時代はまだサイレント映画。ヒッチコックは大きな透明のガラス板を天井にはめ込み、その上を歩き回る下宿人を下から撮影することで足音を表現した。観客は2階の床の上を歩く殺人者を、まるで自分の頭に思い描いたかのように見ることができた。



断崖 / Suspicion (1941年)

【あらすじ】浪費家でウソつきの男性と結婚してしまったヒロイン。彼女は夫が殺人者で、いつか自分も殺されるのではないかと思いはじめ。ある日、夫が妻に飲ませるため、毒入りのミルクを持って階段を上がってきて…

このシーンでヒッチコックは、観客の眼がミルクの入ったコップだけに注がれるように、ミルクの中に豆電球を入れている。おかげでミルクの白さが輝く印象的なシーンが出来上がった。



ロープ / Rope (1948年)

【あらすじ】ニューヨークの高層マンションの一室で、ある日の夕方から夜までの1時間45分の間起きた殺人事件を、進行時間そのままに映画に置き換えた。カメラは切れ目なくワンカットで事件を追っていく…

マンションの外景は、遠近感を出すためにマンションのセットより3倍大きく作り、透明なワイヤーで雲も浮かべた。さらにスタッフたちがこの雲を少しずつ移動させ、時間の経過を表現した。



北北西に進路を取れ / North by Northwest (1959年)

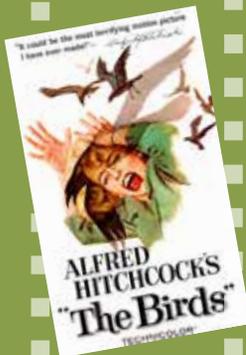
【あらすじ】米情報部が敵のスパイを欺くために作り上げた「架空の人物」に間違えられた男性が、スパイたちから命を狙われ…

主人公が駆け込んだ国連本部の建物は、内外とも全てセット。国連内での撮影は禁止されていたため、隠しカメラで資料になる写真をこっそり撮影し、本物と一分も違いがないように作り上げた。これはヒッチコックが常にこだわる点で、どの作品も実際の場所で撮影できない場合は、本物そのままのセットを作り上げて再現した。

鳥 / The Birds (1961年)

【あらすじ】屋根裏部屋に向かったヒロインが、突然鳥の群れに襲われ…

機械仕掛けの精巧な鳥や調教された鳥を使うことも考えたヒッチコックだが、結局はヒモで足を結わえた本物の鳥を大量に使った。そのため、ヒロイン役のメラニー・ダニエルズは実際に鳥たちに襲われ、顔などに深い傷を負った。これが原因で、彼女とヒッチコックの関係は不和になったと言われる。なお、鳥の不気味な鳴き声や羽ばたきの効果音は、作曲家のバーナード・ハーマンが電子音を使い編集した。



「鳥」の宣伝写真で、おどけた表情を見せるヒッチコック。

「ホモセクシャル的」として書き直しを命じられてしまうことなどが続き、ヒッチコックはかなり頭を痛めた。さらに、当時のハリウッドではミステリーやサスペンスなどのジャンルは「B級映画」と考えられていたため、ヒッチコックが出演を依頼した有名俳優たちの多くが、その依頼を断つて来るといふ悲劇にも見舞われている。『白い恐怖』（1946年）以降、デ

しかし1960年代に入ると、女性解放運動が米国に吹き荒れる。ちょうど同じ頃、ヒッチコック作品のヒロインたちが皆「ブロンド美人」ばかりであるという批判が噴出していった。

クールな金髪美人がお好き

ヴィッド・O・セルズニックを始めとする、口うるさい辣腕米国プロデューサーとの契約が切れたヒッチコックは、自らのプロダクションを立ち上げ、以後全て自身がプロデュースに携わっている。これにより、彼は水を得た魚のようにヒット作を放ち始めた。とくに1955年以降は最も創作活動の盛んな時期であり、『知りすぎた男』『めまい』『北北西に進路をとれ』『サイコ』『鳥』を矢継ぎ早に発表。さらに、テレビという新しい映像媒体にも興味を向け、米テレビ・シリーズ『ヒッチコック劇場』を総監修。これは1962年まで放映された毎回完結の短編サスペンスドラマだが、どのエピソードにもユーモアやどんでん返しの妙味が効いた人気番組となった。



「裏窓」撮影時の様子。左から主演のジェームズ・ステュアート、グレース・ケリー、ヒッチコック。キム・ノヴァクやティビ・ヘドレンなど都会的でクールな金髪美人を好んで主演に抜擢し、口説くものの、男性としては全くモテなかったという。

確かにヒッチコックは好んでブロンドの女性を起用しており、なかでもグレース・ケリーは大のお気に入りだった。彼によれば、「洗練された都会的な金髪美人」ばかりを使う理由は「内面に炎のように燃える情熱を秘めながら、表面は冷ややかに慎ましやかに装っている女性」の方が驚きや発見があり、サスペンスに向いているとのこと。マリリン・モンローやブリジット・バルドーのような開けっぴろげな性的魅力を持つ女性には驚きがない、と説明している。ベトナム戦争やヒッピームーブメントが起こる中、ヒッチコック作品の登場人物たちは、彼お決まりの黒スーツ&黒ネクタイ姿と同様に、「時代遅れ」の様相を示し始めていた。やがて肥満が原因で次第に歩行に困難をきたし、『ファミリー・プロット』（1976年）の撮影中には心臓発作を起こし、歩くことができずに車の中から指示を出した。次作『みじかい夜』のシナリオを前にスタッフと話し合う時には腎臓病と関節炎も併発しており、もはや自分が思うように映画を撮れない身体であることに絶望したという。ついに1979年5月、ヒッチコックは自身の事務所を閉鎖。翌年の4月29日、ビバリー・ヒルズの自宅で眠ったまま息を引き取った。80歳であった。死の半年前にナイトの称号を受けていたため、5月8日に故郷のロンドン・ウエストミンスター寺院では国葬扱いの礼拝が行われ、遺体が戻ること期待されたが、ハリウッドを愛したヒッチコックは生前の希望通り米国で火葬され、遺灰は太平洋に散布されている。その2年後に亡くなった妻アルマの遺灰も、同じ場所で散布された。